5万トン時代へ

青森リンゴ輸出 8

東南アジア市場を開拓

戦後の取り組み

戦前のリンゴ輸出は、前回で紹介したように中国大陸の植民地に向けて出荷され、1940（昭和15）年に最高の126万箱を記録。同年のリンゴ生産量1千万箱の12％に達した。

ところが、戦後、大陸における植民地を失い、状況は一変する。力によって輸出した戦前と違い、物資や外貨が不足していた東南アジアに低価格のリンゴを提供し、販路を開拓しなければならなかった。

戦後の輸出の記録は50年からスタートしており、この年は香港と台湾向けにわずか7万5千箱が出荷されている。49年に中華人民共和国が成立し、香港を経由して東南アジアに移動する難民が増えた。食料品の需要が増す中で、香港向けの輸出が有望視されるようになった。

52年4月24日に青森県りんご輸出協会が設立された。この年は、リンゴが大豊作で国光、紅玉の小玉が香港に47万箱、GHQの特需で17万箱など、計72万箱が輸出されている。

輸出協会は県内のリンゴ関係団体で構成され、当初は県庁に事務局が置かれた。その後、社団法人化やりんご輸出共販共同組合の設立による輸出事業の一本化などを経て今日に至る。

「青森県りんご百年史」には、このころから輸出に関わる個人名がほとんど登場しない。協会など団体ベースで輸出が進められたのではないかと思われる。

55年2月に県と輸出協会で戦後初めて香港と台湾の市場調査を実施し、台湾市場の有望性に着目。同年8月に日台貿易協定の品目にリンゴが加わったことが、今日に続く台湾向けリンゴ輸出の礎になっているのではと思われる。

61年には香港青森駐在所がジェトロの香港貿易斡旋所内に設置（66年に廃止）されている。香港事務所では東南アジアの市場調査、外国商社の信用調査、リンゴの消費宣伝を行い相当の効果を上げている。

県や輸出協会など官民による積極的な取り組みが、早くからの海外事務所設置につながった。頼もしい限りである。

（県りんご輸出協会事務局長　深澤守）

1961年1月、県りんご輸出協会などが香港大丸デパートで開いたリンゴ宣伝会（青森県りんご百年史から）